

日本における蘇東坡受容の揺籃期（上）

吉 井 和 夫

—

宋の文人である蘇東坡（名は軾。一〇三六—一〇一〇）は、日本でも、少なくとも昭和の半ばまでは、李白や杜甫あるいは白居易といった唐の詩人たちと同様によく知られた存在であった。たとえば東坡を主人公に据えた谷崎潤一郎の戯曲「湖上の詩人」⁽¹⁾や、「赤壁の賦」に見立てた成島柳北の「辟易の賦」⁽²⁾など、その人柄や原作を読者の多くがよく知っていることを前提にしなければ、生みだされることなどなかったであろう。あるいはもつと身近なところから拾ってみると、瀧廉太郎の作曲で親しまれる「花」⁽³⁾の歌詞に、「げに

一刻も千金の、ながめを何にたとふべき」とあるのは、あまりにも有名な東坡の「春宵一刻 值千金」⁽⁴⁾（「春夜」の句をふまえたものであることや、アイルランド民謡の「夏の名残のバラ」に日本語の歌詞をつけた「庭の千草」⁽⁵⁾の「露にたわむや、菊の花。しもにおごるや、きくの花」といった表現も「菊は残えて 猶お霜に傲るの枝有り」（劉景文に贈る）という一句からきていることなど、まことに些細な例ではあるが、それだけに一層日本文化に根付いていたことを物語っている。では、こうした日本における東坡受容はいつ頃から本格化し、どのように変化を遂げていったのであろうか。その先駆けとなった人物として先ず取りあげてお

きたいのが、曹洞宗の開祖として知られる道元(一一二〇〇―一二五三)である。その著『正法眼蔵』の中で東坡について触れている「溪声山色」の條を、次に挙げておきたい。

大宋国に東坡居士蘇軾とてありしは、字は子瞻といふ。筆海の真龍なりぬべし、佛海の龍象を学す。重淵にも游泳す、曾雲にも昇降す。

このように東坡が宋の文壇にあつて「真の龍」であるのみならず、龍象にも比すべき大徳について学ぶなど仏教にも造詣が深い人物であることを賞賛してのち、篇名にもなつてゐる廬山で詠つた偈文「東林の総長老に贈る」(『蘇軾詩集』卷二十三)へと話を展開させてゆく。

溪声便是広長舌 溪声 便ち是れ広長舌

山色無非清浄身 山色 清浄身に非ざる無し

夜来八万四千偈 夜来 八万四千の偈

他日如何拳似人 他日 如何ぞ人に拳似せん⁽⁶⁾

溪流の音や山の佇まいといった、本来情を持たないものの中に佛の説法を聞き取るうとするのを、禪宗では

無情話、あるいは無情説法話と呼ぶが、道元は東坡の偈文にその典型とも言ふべき表現を見出したのである⁽⁷⁾。そのため「しかあれば、聞溪悟道の因縁、さらにこれ晚流の潤益なからんや」と述べ、東坡が溪声を聞いて悟りを得たことは、後学の者にも利益をもたらすに違いないと高く評価している。この「溪声山色」のくだりが深草の興聖寺で修行僧の前に説かれたのは延応二年(一二四〇)のことであるが⁽⁸⁾、あるいは道元が東坡の存在を知り、その作品に接したのは、さらにさかのほつて宋に渡つていた貞応二年(一二二三)からの四年間のことかもしれない。渡宋中に掛錫した寺院のうちには、東坡所縁の阿育王山広利寺などが含まれており、若き日の道元がその存在に興味を抱いたとしても、何の不思議もないからである。以上、道元の東坡に対する評価こそ、日本における本格的な受容の黎明を告げるものといつて過言ではなく、本稿で取りあげる時代の下限を十三世紀の半ばに設定したのもそのためである。

道元示寂ののち百年を待たずして南北朝時代に入る

が、その頃になって東坡受容の流れをはっきりと現出させたのが、同じ禪宗でも臨済宗の僧徒たちであった。とくに京都や鎌倉の禅林五山では、東坡の詩は黄山谷のそれとともに詩文を作るに際しての軌範とされ、抄物と呼ばれる注釈の数々が残されたことは、国文学のみならず国語学史上でも特筆すべきことであらう。ところが江戸時代になるとそうした受容層が一変し、縮流への影響はごく限定的なものとなり、かわって文人や学者をはじめ幅広い階層の人々に親しまれ、漢詩文はもとより随筆や小説の類い、ひいては書画に至るまで、多種多様な受容が見られるようになる。こうして見てくると、冒頭に引いた明治以降の作品の数々は、江戸期の影響下に生まれたものであることがよく分かるのである。

こうした八百年以上にわたる日本の東坡受容であるが、それを概観しようと試みたものは、昭和二十九年（一九五四）に発表された早川光三郎氏の「蘇東坡と国文学」（『斯文』第十号。以下、早川論文と略称す）が、現在でもほとんど唯一のものと言わなければならない。

これは時代を追って主に国文学の様々な分野への影響を俯瞰したもので、まことに先達とも言うべき役割を果たしているが、その多方面にわたる資料の全てを組上に載せることを目指したものではないため、個々のテーマについてのさらなる掘り下げは後世の研究に任せられることとなった。それから半世紀以上が経った現在、五山文学や近世の文学、あるいは書画などの方面で、豊富な資料とその分析に基づいた論考が次々と生みだされている一方で、いまだに等閑視されている時代や分野があることも否めないであらう。そしてその最たるものの一つが、東坡の名と作品が漸く浸透してきた時期、つまり道元以前について掘り下げた論考が見当たらないことである。そこで次章以下では、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての、謂わば東坡受容の揺籃期について検討を加えるとともに、それらを日中の時代相の中で捉えることができるように努めたい。

これまで日本人の手によって東坡の名が記された最も早い例とされているのは、早川論文も指摘するように、藤原頼長（一一二〇～一一五六）の日記、『台記（宇槐記抄）』の仁平元年（一一五二）九月二十四日の條である。⁹⁾ それによれば、前年の久安六年に宋の商客である劉文冲が史書に名籍を付して差し出してきたので、『資房記』の万寿三年（一一二六）の條に見える前例に則り、砂金三十両に要書目録を添えて与えたと言う。その折に携えてきた次の三種の「史書」の中に、東坡が著したとされる書が挙げられているのである。¹⁰⁾

東坡先生指掌図 二帖

五代史記 十帖

唐書 九帖

ここで当時の日中間の通商について少し触れておく必要がある。平安時代の初めには盛んであった遣唐使も菅原道真の建議によって寛平六年（八九四）に廃止され、以後は日本の商客による交易は禁じられたため、

入宋僧を除けば、中国からの通商船が大陸の情報を得る唯一の手段となってしまう。さらにその通商船は三年に一度の来航に限るという規定が設けられていたが、実際のところは高利を得ようと毎年のように宋船が来朝し、その際に規定違反を大目にみてもらう見返りとして、顯官に様々な品を献上するのが通例となっていた。¹¹⁾ 右に挙げた劉文冲が頼長に贈った書物もそうした献上品に他ならず、言い換えれば『東坡先生指掌図』は賄賂として日本に持ち込まれたものの一部であった。

では、この東坡の手になるとされている『指掌図』とはどういった書物であろうか。この書は詳しくは『歴代地理指掌図』¹²⁾ と言い、その書名が物語るように、三皇五帝の時代から北宋までの歴代の行政区域と名称を四十四枚の地図に書き入れ説明を付したもので、時代ごとの変遷を簡便にたどることができる一種の工具書である。もともと本書が東坡の撰述であるということについては、すでに宋代から異論も多く、現在では、もともと蜀の税安礼という人物が撰したものを、坊賈

が広く流伝するように、同じ蜀の著名人である東坡の撰述であるかのように手を加えた書物であるというのが通説になっている。⁽¹²⁾ 書物に限らず書蹟や絵画に至るまで、いつの世も東坡には仮託や偽作の問題がついて回るが、このように日本における受容がそうした類似で始まったというのも、それを象徴していると言える。

因みに、『台記』と同じ内容の記事は、約百年後に橘成季が編んだ『古今著聞集』巻四「宋客劉文冲宇治左府頼長に典籍を贈る事」の條にも見ることができ。

仁平の比、宋朝商客劉文冲、東坡先生指掌図二帖・五代史記十帖・唐書九帖、名籍をそへて宇治左府にたてまつりたりけり。返事は文章博士茂明朝臣草して、前宮内大輔定信ぞ清書したりける。尾張守親隆朝臣が奉書にぞかきたりける。砂金廿兩をたまはせけり。又要書目六をもつかはしけり。万寿三年に、周良史といひけるもの、名籍を宇治殿にたてまつりたる事ありけり。そのたびは、書をばたてまつらざりけり。

『古今著聞集』は、かつての王朝文化への懐旧の情から筆を執ったとされるが、頼長と宋商とのやりとりは、まだ成季にとつてはその余香を感じ取ることでできる出来事と映ったのであろう。

以上見てきたように、『歴代地理指掌図』そのものは東坡の令名を当て込んでの坊賈の出版物に過ぎないが、こうした記録が残るところから推察し、早川論文は「ともあれ平安末期に東坡の名がわが国に知られ、それと前後してその文学も渡来したのであるまいか」と推察している。それについては次章以下で、さらに別の角度から探ってみることにしたい。

頼長は右の文を記した五年後に保元の乱で敗死したが、その時の勝者である後白河天皇の側に、やはり当代を代表する学者として知られる藤原通憲（みちのり一一〇六―一一五九）がいた。通憲が家蔵していた書については『通憲入道藏書目録』一卷が遺されており、彼がどういった書に目を通して教養を深めていったかを知ることがかりを与えてくれる。⁽¹³⁾ 同書の中には、『台記』の

ように東坡の名やその撰述したとされる書物についての直接的な記述は見られないが、次に挙げる両書についてには少し触れておく必要がある。

その一つが王安石（一〇二一〜一〇八六）の詩を集めた「臨川先生詩 一部五帖」である。⁽¹⁴⁾ 言うまでもなく王安石は北宋中葉にあつて政治改革を断行したことで知られる人物であり、東坡とは政治的立場を異にしていたが、晩年に致仕してからは親しく言葉をかわす機会もあり、東坡の詩に次韻した作品など七首を残している。⁽¹⁵⁾ したがつて、この『臨川先生詩』が王安石の全ての詩を収めたものであるとすれば、それらを通じて東坡にも僅かながら繋がることになるのである。

もう一つは「筆談 上軼十卷、中軼十卷、下軼三卷」⁽¹⁶⁾と記されている書物で、これは沈括（一〇三一〜一〇九五）が著した随筆集『夢溪筆談』を指している⁽¹⁷⁾と推測される。それは同書を沈括自ら『筆談』と呼び、少なくとも南宋のはじめ頃までは一般にもそのように呼ばれていたことに加え、他の筆談と簡称しうる書物に比べて、巻数が現在通行している二十六巻本に極め

て近いからである。⁽¹⁶⁾ もしこれが同書を指すのであれば、巻九にはこれも僅かではあるが東坡への言及が見られ、さらに『続筆談』には父蘇洵の記事が見られることになる。

通憲が右に掲げた書物を入手した時期は不明で、この蔵書目録がまとめられた時期についても諸説あるが、いずれにせよ『台記』の記事と相前後して東坡の存在を物語るものが将来され、その名が徐々にではあつても知られつつあつたことは確かであろう。⁽¹⁷⁾

ところで、宋朝では東坡の大才は生前より世に知られていたが、父の蘇洵と弟の蘇轍も文人官僚として聞こえた存在であつたため、人々はこれら父子を尊崇の念を込めて三蘇と呼んでいた。ここで参考までに、東坡のみならず三蘇にまで範囲を広げて受容の様子を探しておくこととする。

まず最も注目しておきたいのは通憲の目録に見える「蘇子由 史記列伝廿帖」という記載である。この蘇子由というのは、前述の三蘇の一人、弟の蘇轍を字で

呼んだものである。蘇轍の著述の中にはこういった書名は見当たらないが、これは恐らく蘇轍が『史記』について独自の論評を加えた『古史』六十巻のうち、列伝を取りあげた巻二十四から巻六十に至る部分、三十六巻の全巻もしくはその一部を指すものとみて間違いない。¹⁸⁾『古史』は北宋の頃より何度か刊行されたことが書目に見えており、それらの内の一つが将来されたと考えられる。

また、これは前者ほど確定的なことは言えないが、『台記』にも父蘇洵が撰述したものと同名の書物が見られる。それは東坡の名が記される約十年前、（一一四一） 九月二十九日の條に、頼長はこれまで読んできた書物の名を悉く列挙しているが、その中に見えている「諡法 一卷」という書物である。これは諡号を贈るにあたっての規範について過去の事例を踏まえてつ解説を加えたものと考えられるが、蘇洵も『太上因革礼』の編纂に携わっていた嘉祐年間に、同名の書を著しているのである。もっとも『諡法』と名付けられた書物は、古くは漢の劉熙、梁の沈約や賀琛など

によっても撰せられており、頼長の読んだのが蘇洵の書であると決めつけることはできないため、ここではその可能性があることだけを指摘しておきたい。¹⁹⁾

このように、東坡兄弟、あるいは三蘇の著述が、ほとんど時を同じくして日本に渡ってきたのであるが、それらに共通して言えることは、偽書のことはさておくとしても、いずれも『嘉祐集』や『東坡集』、『欒城集』といった、その本領を發揮した詩文集のような名著ではなく、地図や歴史を簡便に知るといった実用の面に重きをおいたものに限られている点である。これは当時の日本の政治的、文化的状況がかなり逼迫し、新たな宋代文化を撰取するだけの余裕に欠けていたからであり、これではその真面目を伺うには程遠かったことを念頭に置いておく必要がある。

三

前章で述べたように、東坡の名と作品は、『台記』にその名が記された十二世紀の半ばには、宋代文化が

おいおい浸透するにつれ、やっと一部の人々の間で知られつつはあったが、まだそこには唯一無二の個性を見抜いた上での受容と言うには、ほど遠いものがあった。それが平安時代の末から鎌倉時代の初めともなると、質的にも量的にも見るべきものが徐々に現れはじめ、鎌倉中期から南北朝における本格的な受容への橋渡しの役目を担ったことが窺われる。以下の章では、これまで比較の見過ごされてきた、『台記』から『正法眼蔵』に至るまでの約九十年間の受容相について、その詩文や書蹟など多方面から見ていくこととする。

東坡の二千八百首にも及ぶ詩は、文と並んでその創造の核をなすのみならず、宋代の詩風を確立したものととして文学史上ゆるぎない評価を得ているが、そういった蘇詩の日本における最初期の受容として、和歌の註釈への引用が見つかったことは注目に値する。それは新井栄蔵氏の「中世前期古今和歌集注釈書四種引書一覽」(『中世文学と漢文学Ⅱ(和漢比較文学叢書)』一九八七年、汲古書院刊 所収)の中で初めて紹介されたもので、顕昭の『古今集注』に一箇所ではあるが

東坡の詩を引いていることが指摘されている。いったいに『古今和歌集』の注釈書は後世夥しく作られたが、注釈者としてとりわけ大きな足跡を残した一人に、平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した顕昭(一一三〇～没年未詳)がいる。顕昭は六条家左京大夫顕輔の猶子で、若くして比叡山で学んだがやがて山から下り、六条家の歌合わせに顔を出す一方で、数多くの和歌の注釈書や歌学書を著している。歌人としての評価のさほど高くない彼が、当時からこの分野で揺るぎない名声を得ているのは、こうした著述によってのことである。今ここで取り上げたいのは、そうした注釈書の一つ、『古今集注(管見抄)』の卷十一、恋歌の項に見える、詠み人知らずの和歌に付された注釈である。

奥山すがの菅すがの根しのぎ降る雪の消ぬけとかいはむ恋のしげきに

(訳) 奥山に生える菅の根を押し分けて降り積もる雪でさえ消えるのであるから、絶え間なくわき起こる恋心にこの身も消えさると言おうか。

この和歌に対して、顕昭は頭注として東坡の「再び前韻を用う」（『蘇軾詩集』卷三十九）という古詩の冒頭の部分を引いている（引用は原文のみ）。

樂天双鬢如霜菅 樂天の双鬢 霜菅そうかんの如し

始知謝遺素与蛮 始めて知る 素と蛮とを謝遺しゃいけん

せしを

白樂天は 双鬢が霜の降りた菅のように白くなつたのは

家妓の樊素と小蛮に暇を出したためだとはじめて気がついた

ここに見える「霜菅」とは白く霜が降りた菅すげを意味しており、和歌にある菅の根を押し分けるほどの雪に對する注釈としては妥当性に欠けると指摘されても仕方の無いものであるが、あるいは顕昭もそれは承知で、あえて人々のあまり知らない出典をここに出したかったのかもしれない。²⁰もしそうであれば、この注釈は、平安の末になつてもまだ東坡の詩に接することのできる人がごく限られていたことの傍証ともなり得るであろう。

ところで、顕昭が『古今集註』を守覚法親王に献上したのは建久二年（一一九一）のことであるが、歌注は文治元年（一一八五）の十月から十一月にかけて八回に分けて注進したとされており、したがってこの東坡の詩を引いたのも同年のことと考えられる。これは『台記』の記事から三十四年後のことであり、おそらくこの注釈の記述が、現存する中で、日本における東坡の作品を引用した最も早いものの一つと言えよう。

では顕昭はどのようなテキストに基づいて、この注釈を著したのであろう。それを考察するにあたって先ず念頭に置いておかなければならないのは、この「再び前韻を用う」の詩が、名作に事欠かない東坡詩の中にあつては、けつして注目される作品ではなかつたという点である。そのことは、歴代の詩話の類に取り上げられた痕跡が全く見られないことや、詩の選集に載せられた例も、明の譚元春の手になる『東坡詩選』十二卷のみであることがよく物語っている。そう考えると顕昭が目にしたのは、全ての詩文をまとめた『東坡集』の系統か、もしくは全詩についての注釈本の何れかと

いうことになろうが、この時はまだ東坡受容が端緒に
ついたばかりでもあり、詩文を網羅した前者ではなく、
王安石の場合もそうであったように、先ず詩集がもた
らされたと考えるのが穏当であろう。

ではこの当時、顕昭が目にするのできた詩集と
は、具体的にどういったものであろうか。いったいに
東坡の詩の注釈は生前より数多く作られたが、南宋時
代になると、それらを踏まえた上でそこに自説を加え
たものが現れてくることとなる。その一つが王十朋が
呂祖謙の分類によって撰したとされる『王註蘇詩』で、
これはすべての蘇詩を内容によって分類し注釈を付し
たものである。これに対し、やはり全詩を編年体でま
とめた施元之の『施註蘇詩』が相前後して現れ、これ
らが南宋時代における蘇詩注釈の二つの大きな潮流を
形作ったとされる。やがてこれらは漸次日本にももた
らされることになるが、その際に喜ばれたのは、学術
的価値の高い施註よりも、分類という初学者にとつて
受け入れやすい体裁をとった王註の方で、後には開版
を重ねるなど東坡受容に大きな影響を与えることにな

る。これらについては西野貞治氏の「東坡詩王状元集
注本について」（『人文研究』第十五巻 第六号
一九六四年）や、倉田淳之助氏の「施宿編東坡先生年
譜の発現」（『東方学報』京都第三十六号 一九六四年）
の中で詳しく論じられており、これらの先行論文によ
れば、顕昭が『古今集註』の撰述に際して目にするこ
とのできたものは、数ある版本の中でもごく限られた
ものにしぼられることとなる。まず『施註蘇詩』につ
いて言えば、撰者である施元之が没したのは淳熙七年
（一一八〇）から翌年にかけてのこととされるが、そ
の注釈書が刊行されたのは三十年余り後の嘉定六年
（一二二二）のことであり、顕昭が目にしたとはまず
考えられない。いっぽう『王註蘇詩』については、南
宋から元にかけて覆刻も含めると七種ほどの版本が確
認されるが、その最も古い版は、建安（福建省）の黄
善夫が刊行した家塾本であろうとされている。⁽²¹⁾この黄
善夫刊本は、孝宗の諱である「真」と同音の「慎」を
闕筆とするところから判断して孝宗在位中（一一六二
―一一八九）の刊本とされるが、さらに刊行時期を絞

り込もうとするならば、同書が王十朋と呂祖謙の手に
なつたとされていながら、その実、書肆が兩人に仮託
して作り上げた書であるという成立事情を考慮する必
要があるう。したがって王註の刊行は、乾道七年
(一一七二)に没した王十朋や淳熙八年(一一八一)
に没した呂祖謙の身後になされたと見るべきで、西野
氏が「淳熙末年の出版でないかと推定」し、倉田氏も
「淳熙九年(一一八二)頃から慶元(一一九五)
一一〇〇)頃の間に来たものと推定」しているのも
そうした理由によっている。右に挙げた事情を勘案す
れば、王註の最も古い刊本は、刊行後ほどなくして日
本にもたらされ、いち早く顕昭の目に留まるところと
なつたのではなからうか。さらに言えば、丁度このこ
ろ絶頂期にあつた平清盛の政策により、大陸との交易
がにわかには盛んになつたことも背景にあつたのかもし
れない。

では、なぜ顕昭は二千八百首という龐大な作品の中
から、この目立たない作品に注目したのであろうか。
それは平安期に親しまれた白居易との関わりから見え

てくるように思われる。顕昭は将来されたばかりの王
註に目を通して、たまたま馴染みのある「楽天」
の語が目にはいり、そこに「霜菅」という見慣れない
詩語があるのに気付いた結果、何とかそれを注釈とし
て活かしたいと思つたのではなからうか。言い替えれ
ば顕昭を「霜菅」の語にまで導いたのは、偶然にもせ
よ日本での根強い白居易に対する愛好であるとも言え
るであらう。

以上、本稿は「日本における蘇東坡受容の揺籃期」
の前編として、一部を除き、主に平安時代の末に至る
までの受容を見てきた。そこには王朝文化の衰退の中
で東坡の作品がもたらされたがために、それが十分に
咀嚼吟味されず、文化的影響が大きな流れを形成する
に至らなかつたことなどが明らかになつた。その意味
で、平安時代の初、中葉における『白氏文集』の受容
とは著しい対照を見せていると言えよう。ただ、この
時期に将来されたものの全てがすぐに忘れ去られてい
つたという訳ではなく、それらが徐に形を成しつつあつ

次の半世紀への布石になったことを忘れてはならない。後編では主に鎌倉時代の初期から、道元が『正法眼蔵』を著した中期頃までに焦点をあて、ゆっくりではあっても確実に変わりつつあるその受容相をさぐってゆきたい。

注

- (1) 谷崎潤一郎「蘇東坡（三幕）——或は「湖上の詩人——」の初出は『改造』二十大正九年（一九二〇）。後に『谷崎潤一郎全集第七巻』（一九六七年、中央公論社刊）所収。
- (2) 成島柳北「辟易の賦」の初出は、明治八年（一八七五）八月十七日の『朝野新聞』所載。後に『明治文学全集 第四巻』（筑摩書房刊）、『日本近代思想大系 第十六巻』（岩波書店刊）所収。
- (3) 「花」の歌詞は、武島羽衣により明治三十三年（一九〇〇）に発表された歌曲集『四季』の第一曲に収められた。
- (4) 「春夜」の詩がはじめて詩集に収められたのは清の査慎行『東坡先生編年詩』からで、それまでは楊万里の『誠齋詩話』や呉喬の『圍爐詩話』、魏慶之の『詩人玉屑』などの詩話類によって伝えられていた。
- (5) 一八〇五年、トーマス・ムーアがアイルランド民謡「プレーニーの木立」の旋律に新たに歌詞をつけたのが、『The Last Rose of Summer』の歌¹⁾、さらに里見義の作詞による「庭

の千草」の歌は、明治十七年（一八八四）に『小学校唱歌集 第三編』に発表された。

- (6) 『正法眼蔵』に引かれた偈文の「山色無非清浄身」の句は、通行の詩集や全集ではすべて「山色豈非清浄身（山色豈に清浄身に非ざらんや）」に作っており、宋代の詩話類も同様である。道元が何に基づいて記したのかについては後考を俟ちたい。

- (7) 無情説法話については『正法眼蔵』や『永平広録』などにしはしば言及が見られる。また道元の和歌の中にも「峰のいろ谷のひびきも皆ながらわが釈迦牟尼の声と姿」と、明らかに東坡の偈文を下敷きにした一首が見られる。この和歌について松本章男氏は『道元の和歌』（中公新書 1807 二〇〇五年刊）の中で、興聖寺で「溪声山色」を説くのに先だって詠まれたものと記している。

- (8) 「溪声山色」が説かれた時期と場所については、この條の末に「爾時延応庚子結制後五日在觀音導利興聖宝林寺示衆」と見えている。

- (9) 早川論文では「台記・百練抄の仁平元年（一一九一）九月廿四日の條」と記すが、『百練抄』の條にはこの記事を記すものの、「東坡先生指掌図」などの具体的な書名は挙げていない。また仁平元年を西暦の一九一一年としているのは一一五一年の誤りで、「実に彼の没後九十年目にあたる」との記述は、「没後五十年目」に書き換える必要がある。

- (10) 『台記』には「去年、宋国商客劉文冲、与史書等副名籍。……以沙金卅兩報之、書要書目錄賜文冲。此書之中、若有所

得、必可付李便進送之旨仰含了。件目錄、先年為召他宋人、成佐書之。檢領大宋国客劉文冲進送書籍事」と記し、本文に記した三書を挙げた後、劉文冲に与えた返札の書簡文を載せている。

(11)

宋との交易については、森克己氏の「宋史書書の需要」(「日宋交通と宋代典籍の輸入」(増補 日宋文化交流の諸問題」(二〇一一年、勉誠出版刊)所収)に詳しく説かれている。

(12)

『歴代地理指掌図』について『宋史芸文志』や『中興館閣書目』はともに二巻本を録するが、前者は撰者名を記さず、後者は撰者不明とする。これに対し『玉海』や、明刻本に見える宋の趙亮夫の序では東坡の手になるとするが、『朱子語類』は東坡の名は偽託に過ぎないとし、費衮も『梁溪漫志』の中で「何人の作るところかを知らず」と述べている。さらに東坡以外の撰者名を挙げているのが『直齋書録解題』で、そこには蜀人の税安礼が本書を撰し、元符年間に朝廷に奉ろうとしたが、果たせないうちに亡くなったことが見えている。これら撰者の問題について、王重民の『中国善本書提要』や『美国国会図書館蔵中国善本書録』は、もとは北宋時代に蜀の税安礼が撰したが、坊刻本ではその名が伏せられ、やがて蜀の地で広まるにつれ、同じ蜀出身で知名度の高い東坡の名を偽託したのではないかと推測している。またこれ以外に、北宋の末から南宋の初めにかけての記述が見えている点も問題になるが、これは傅增湘が『蔵園羣書経眼録』で述べているように、趙亮夫が増補したものとする解釈が穏当であろう。

なお同書については、現存する唯一の宋刊本が東洋文庫に

所蔵されている。これは「西川成都府市西俞家印」の刊記を持つ南宋刊本であるが、『台記』の記事よりも少し後に刊行されたようで、将来時期は不明である。『東洋文庫の名品』(二〇〇七年、同文庫刊)資料番号124に書影と解説を載せる。なお同書は、後に東福寺を開いた円爾弁円が将来した書籍の目録『普門院経論章疏語録備書等目録』にもその書名が見えていて、複数の書が将来されていたことが確認できる。おそらく中国の広い領域と長い歴史を俯瞰するためには便利な書物と考えられたのであろう。

(13)

『通憲人道蔵書目録』は『群書類從』巻四百九十五、および『日本書目大成』1(一九七九年、汲古書院刊)所収。なお頼長や通憲が目にした書物については、大庭脩氏の「平安時代の読書人」(『漢籍輸入の文化史』一九九七年、研文出版刊)所収)に詳しく説かれている。

(14)

『臨川先生詩』という書名は諸目録には見られない。あるいは王安石の詩文を集めた『臨川先生文集』百巻の誤りか。

(15)

王安石が東坡の詩に次韻したものとしては、「和子瞻同王勝之游蔣山」(『臨川先生文集』巻十六)、「読眉山集次韻雪詩五首」(同巻二十六)、「読眉山集愛其雪詩能用韻復次韻一首」(同巻二十六)の七首が確認できる。詳しくは『蘇軾資料彙編』(一九九四年、中華書局刊)王安石の條参照。

(16)

同書が『夢溪筆談』と呼ばれるようになったのは、南宋になって三十年余りが経つてからで、それまでは『筆談』もしくは沈存中『筆談』(存中は沈括の字)と呼ばれていたとされる。これについては、『夢溪筆談』2(『東洋文庫362』(一九七九年、

平凡社刊)に付された梅原郁氏の解説に詳しい。なおこの二十三巻本について梅原氏は全く触れていないが、同書の成立にとって興味深い資料の一つになり得ると考えられる。『夢溪筆談』以外に「筆談」と簡称しうる書物は少なくないが、何れも巻数には隔たりがある。

(17) 『通憲入道藏書目録』には『皇宋百家詩』三帖といった、現在では内容を確認できない書も見えており、これなど東坡の詩が収載されていたことが大いに考えられる。

(18) 岡田正之氏は『日本漢文学史 増訂版』(一九五四年、吉川弘文館刊)第四章「宋学の伝来 上」の中で、「蘇子由の史記列伝二十帖あり、此は蘇氏古史なるべし」と指摘している。なお『古史』の内容や編纂過程、刊行状況などについては、曾棗莊・舒大剛編『三蘇全書』(二〇〇一年、語文出版者刊)史部の「古史叙録」に詳しい。

(19) 蘇洵の撰した『諡法』には四巻本と三巻本が伝わっている。これに対し沈約の『諡法』は十巻本が、賀琛の『諡法』には三巻本が伝わっており、頼長が記した一巻本には現在のとところ該当するものがない。

(20) 「霜音」の語に対し『佩文韻府』ではこの東坡の詩を初出としてゐる。

(21) 黄善夫刊本『王状元集百家注分類東坡先生詩』二十五巻は、現在、北京図書館に所蔵されているが、西野氏の論考では宮内庁書陵部蔵本も同版であると記している。黄善夫の刊行したものは何れも善本として知られ、日本に現存している『史記』や『漢書』は国宝に指定されているが、それらは慶元二

年(一一九六)に刊行されたものである。

なお王註についてはこれに言及する論考も多いので、参考までにここには本文に引いたもの以外を挙げておきたい。

劉尚榮『『百家注分類東坡詩集』考辨』(『蘇軾著作版本論叢』

一九八八年、巴蜀書社刊 所収)

曾棗莊「南宋蘇軾著述刊刻考略」(『三蘇研究』一九九九年、巴蜀書社刊 所収)